

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし（Ⅱ）は出題者による注です。なお、出題の都合上、省略している部分があります。

腕時計を見ると、お迎え時間の16時になろうとしていた。7月中旬の陽射しは、この時間になってもまだ暑い。太陽にまで追い立てられている気分になって、ストッキングのはりつく足を速める。仕事のファイルに加え、特集誌を2冊入れているせいでショルダーバッグがパンパンだった。

幼稚園は、橋を渡った向こう岸にある。今から拓海をピックアップして、ファミレスで早めの夕食を食べて、帰宅して、そのあとは……。ああ、拓海を風呂に入れたり寝かしつけたりしなくちゃいけないんだ。今日は練習することがあるのに。仕事よりもうんと荷が重い、結婚してから最大のミッション（任務）だ。

私は明日、初めて拓海の弁当を作らなくてはならない。

さつきカフェでめくった弁当づくりの本には、「おいしそうに見える基本の5色」が載っていた。赤、緑、黒、茶、黄。赤のプチトマトは入れるだけだから楽勝。緑はブロッコリーで、茹で具合に自信はないけどそう難なくいけるだろう。黒は海苔、小さいおにぎりを作るとして、茶色はウインナーを炒めればいい。よくわからないけど、切り目を入れればタコだとかカニだとか

になるはず。

黄色。

そう、問題は、黄色。黄色い食べ物って、そして弁当って、もうアレしかない。

幼稚園の門が見えてきた。考えてみたら、幼稚園に拓海をお迎えに行くのも初めてだった。入園してから2年以上たつのに、私がこれまで幼稚園を訪れたのは、入園式と運動会、クリスマス会くらいのものだ。どれも輝也と一緒に、ビデオカメラを回した。でも今日は、隣に輝也がいない。ひとりでは心もとなくて緊張しながら門をくぐると、横から誰かに「こんにちは」と言われた。

そちらを向くと、4人のお母さんたちがぐるりと輪になっている。そのまわりで子どもたちが追いかけてっこをしていた。お母さんも子どもも、誰ひとり見覚えがなくて私は体をこわばらせる。

ボーダー（Ⅱ）のシャツを着た、お母さんのひとりが私を見ていた。声をかけてくれたのは彼女だろう。ぱさついた髪の毛を後ろでひとつにくくり、銀縁の眼鏡をかけている。

「今日はパパじゃないのね」

「あ、はい、ええ」

誰だっけと思いつつ、私はせいっぱいの愛想笑いをした。ボーダーさんは、私に話しかけた方がいいものの、それ以上の会話が広がらないらしくて苦笑いをしている。私は早く場を離れたくて、お辞儀をしつつ園舎に体を向けた。他のお母さんたちもぎこちない笑顔で会釈しながら、私に視線を走らせているのがわかる。

私が彼女たちに背中を向けると、「誰？」「たつくん」とこの「ああ」と話しているのが聞こえた。

「パパ来ないんだー。今日は私、パートで延長保育したけど、たつくんいるからパパに会えるのかと思ったのに」と、輪の中からあきらかにがっかりな声が出て、私は思わず足を止める。

なんだ、人気者なのね、輝也パパは。振り返らずに私は、再び歩き出した。

園舎に入ると、拓海がマッシュルーム頭を揺らしながら「おかあさん」と駆けてきた。両腕をびっと横へ伸ばして、飛行機のマネをする。乗ったことのない飛行機は拓海の憧れだ。

拓海に続き、ハタチくらいの先生が寄ってきた。たしか副担任の、えり先生だ。むきたてのゆで卵みたいに肌がつるんとしていて、ピンクのエプロンがこの上なく似合っている。

「わあ、初めてじゃないですか、ママがお迎えなんて。たつくん、よかったねえ」

またそれか。私が迎えに来ることがそんなに驚きなのか、そ

れともみんな、そんなに輝也に会いたいのか。被害妄想かもしれないけど、普段送り迎えしないことをみんなに責められているように思えた。

拓海はロッカーから通園バッグを取り出し、先生に向かって「おとうさん、キョートなの」と得意気に話した。先生が拓海と視線を合わせるように中腰になる。

「キョート？ 旅行なのかな？」

「ううん、おしごと！」

「へえ、パパ、お仕事始めたの？」

私は先生に「仕事ってほどじゃないんですけどね」と答えながら、通園バッグを拓海の肩にかけた。

「たつくんちはトーキョーで、おとうさんはキョート。トーキョーとキョート」

拓海は覚えてたの地名をうれしそうに唱えながら玄関へ走り出していく。5歳児の脳は、新しいものを取り入れるのが楽しくて仕方ないらしい。

園舎の窓から、まだ話し込んでいるお母さんたちの輪が見えた。私は先生に「あの、あそこのボーダーシャツの方、誰のお母さんでしたっけ」と小声で訊ねた。

「ああ、瑠々ちゃんのママ。添島瑠々ちゃん」

そえじま、そえじまるるちゃんね。私は頭の中で復唱し、言われてみれば入園式のとき隣の席に彼女がいたような、うつすらとした記憶がよみがえってきた。そのとき挨拶と簡単な自己

紹介をしたかもしれない。

「じゃ、失礼します、えり先生」

頭を下げたら、先生のエプロンに「えな」と刺繍されたワッペンが縫い付けられているのに気づいた。しまった、「えり」じゃなくて「えな」だ。

しかし先生はまったく気にするふうでもなく、笑顔で「さようなら」と言って他のお母さんのところに行ってしまった。

はい、さようなら。逃げるように園舎を飛び出す。バカな親って思われたかな。暑さのせいだけじゃない変な汗が、額からにじみ出た。

手をつないで歩道へ出ると、拓海が顔を上げた。

「ねえねえ、おかあさん。おとうさん、飛行機に乗ったかな」

「乗ってないよ。京都には新幹線で行くんだよ」

「新幹線は、飛ぶ？」

「飛ぶない」

「カナブンは飛ぶよ」

「カナブンの話なんかしてないじゃん」

「キョートゆき、たつくん号、離陸しまーす！ 出発しんこーう！」

めちやくちやだ。おもしろいけど。

私は思わず吹き出しながら、拓海の上めた手をぎゅつと握った。

蟬が鳴いている。そういえば少し前に、拓海がお父さんと拾ったと言った蟬の抜け殻を持って帰ってきたつけ。季節の移り変わるこの道を毎日毎日、輝也はこうやって拓海と歩いているんだなと思ったら、なんだか急に仲間はすれみたいな気持ちになつて、胸がきしんだ。

夫の輝也は絵を描いて暮らしている。絵を「売って」ではない。「描いて」いるばかりだ、今のところは。知り合ったときは同じ広告代理店で働く、2つ年下の部下だった。

結婚するまぎわになつて、彼は「僕、絵を描きたいんだよ」と言い出し、「もしできるなら、会社を辞めて家事を受け持たたい」と懇願した。

そう言われて一応「ええーっ」と驚いては見せたが、私は内心ラッキーと思っていた。ずっと実家暮らしに甘んじていた私は、それまで茶碗を洗ったこともなく、炊飯器のスイッチさえ押したことがなかったのだ。

家事なんかより仕事のほうが百倍楽しい。「絵描き志望の夫を食わせる大黒柱の妻」でいられるなら、これで大義名分ができたというものだ。

かくして私はますます仕事に精を出し、輝也はかいがいしい主夫となった。料理が上手で、シーツにまでアイロンをかけ、ちりひとつなく部屋を整える。電車で1時間ほどのところに住

という非情な言葉が喉元までせりあがっていた。私が黙っていると、輝也はとりなすように言った。

「交通費とかホテル代とかなら、僕、自分で出すよ。朝美が働いて稼いでくれたお金は1円も使わないから、お願い」

絶句した。輝也はもしかしたらずっと「お金を稼いでいない自分は好きなことを我慢しなくてはならない、生活費を自分のことに使つてはいけない」などと思いつましく暮らしていたのだろうか。ひよつとしてこれまでも、絵を描くのに必要なものはすべて、結婚前から持っていた自分の貯金を崩して買っていたのだろうか。

私は思わず「そんなのいいよ、出してあげるから使いなさいよ」と言つてしまい、その直後にハツとした。「出してあげる」だって、不遜な自分に気づく。

しかし輝也は、そこには特に引つかからない様子で、さらりと云った。

「いや、ほんとに。お金のことはいいいから。僕もそこそこ稼いでるから」

「え？」

稼いでる？ 私が首を前に突き出すと、輝也はちよつとうつむきながら告げた。

「うん……言つてなかったけど、デイトレード（株などを一日のようなこと。自宅のパソコンなどでも行える。）がわりとうまくいってるんだ」

私は言葉を失った。そんなの、想像もしたことがなかった。

私の両親とぬかりなくうまくやることも忘れない。私が妊娠して産休を取っている間も、彼は私をそれはそれは大事に扱い、拓海が生まれてからは私がしっかり睡眠を取れるように時々別室で寝させてくれた。母乳の出が悪かったのもあって早々にミルクに切り替え、仕事への復帰を早めたので、私は拓海を育児しているという実感があまりない。【中略】

ともかく、我が家は完璧なコンビネーションで成り立っていたのだ。京都から誘いがくるまでは。

インスタグラム（インターネット上で写真などを公開・共有するシステム。観者がコメントなどもつけられる。）に載せた輝也の絵が「独特でユニークだ」と評価されて、フォロワー（読者）が増えたりコメントがきたりしているのは知っていたが、まさかグループ展のオフア（招待）がくるほどだとは思っていなかった。京都のモノ好きなギャラリーのオーナーが、まだ世に出ていない画家やイラストレーターを5人ほど集めて展覧会を開くからやってみないかと声をかけてくれたのだ。【中略】

インスタ（プラットフォームのこと）経由でダイレクトメッセージを受け取った輝也は、私に言つた。

「グループ展自体は金曜から日曜だけど、搬入とか打ち合わせとかあるから、木曜日の朝に拓海を幼稚園に送つてその足で京都に行きたいんだ。だから、木曜日の迎えと、金曜日の送迎と弁当をお願いできないかな。日曜日の最終で帰ってくるから」

私はすぐに「いいよ」とは返せなかった。「仕事あるし、無理」

ほかんとしたまま輝也を見つめていると、彼はうかがうように言った。

「拓海のことお願いできる？」

うん、まあ……。仕方なく口ごもりながら承諾したが、私はそこからずっと、悶々とした不安に取り憑かれていた。

さておき、まずは目の前のハードルをクリアしなければならぬ。

幼稚園の送迎は、その日だけ仕事をやりくりすればなんとかなるだろう。輝也がいけない間の食事も、外食なりデパ地下の惣菜なり、どうとでもできる。

問題は、金曜日の弁当だ。

赤、緑、黒、茶、そして黄。どうにも逃げられない卵焼き。

拓海と一緒にファミレスで夕食をすませて帰宅したあと、私はキッチンに立ち、フライパンを片手に特訓に入った。「卵焼きの作り方」は、本でもネットでもたくさん見て頭に入れたはずなのに、どうしてだかうまいかない。ふっくらせずべたんだし、卵がフライパンにひっついてきれいに巻けない。おまけに、レシピによって卵に入れるのは塩だったり砂糖だったり醤油だったり、あるいは片栗粉や牛乳と書いてあるものもある。

ない育児を輝也に一切まかせて、仕事に逃げてきた。みんながなんでもなくできることができないコンプレックスから逃げてきた。

仕事はどれだけでもやれる。クライアント（仕事を注文してきた人や会社）の名前や顔は一度会ったら絶対に忘れないし、どんな大企業の重役と会っても緊張しないで堂々と意見を言える。みんなをあつと驚かせる企画を出すことも、大勢の人の前でプレゼン（企画や映像などを使いながら効果的に説明すること）することも、部下のミスのフォロー（失敗を助けたり補ったりすること）も、私は誰よりもうまくこなせる自信がある。

だけど、私にはママ友ひとりいない。拓海と同級生のお母さんたちの輪がこわい。幼稚園の先生の名前すら間違える。りんごの皮をむけば食べるところがなくなってしまうし、ゴミは全部燃えるとは思えないし、洗濯ものを折り紙みたいに形よくたたむなんて難しい芸当、私にはできない。

唯一、家計を支えているという自負がこれまではあった。でもそれともう、私を安心させてはくれない。輝也がデイトレードでどれほどの利益を上げているのかは知らないけど、私が収入をなくしたとしてもきつと大丈夫なのだ。輝也にとって、拓海にとって、私がこの家にいる意味ってなんなんだろう。

どうしよう、輝也の絵が売れるようになったら。どうしよう、家にいてくれなくなったら。絵なんか売れないで。誰にも認められないで。ずっと私と拓海のそばにいて。

て、うちの卵焼きはどうなのかわからない。でもそんなことを輝也に電話して聞くのも憚られた。

キッチン台の上に、崩れまくった卵焼きがどんどん並んでいる。リビングでテレビを見ていた拓海がやってきて「うわー！」と声をあげ、無邪気にこう言った。

「これ、なんていうお料理？」

その言葉に私はがつくりと脱力し、無言で新しい卵をボウルに割る。

テレビからアニメの主題歌が流れてきた。拓海は歌いながらあやしいダンスを始め、ぴよんと飛び跳ねると「ぶーん」と飛行機になってリビングに戻った。

箸で卵を混ぜる。シャカシャカ、シャカシャカ。どれくらい混ぜればいい？ どれくらい焼けばうまくなる？ 視界いっぱいの黄色がだんだんぼやけてきて、自分が泣いているのだと知って驚いた。

なんで、なんで。なんで卵焼きくらい満足に作れないのだろう。

子どものころから一生懸命勉強して、大学生になったら一生懸命就職活動して、会社に入ったら一生懸命仕事して、ずっと優秀だ優秀だと言われてきたのに。

仕方ない、私はずっと、逃げてきた。大嫌いな家事と自信の

涙がつつと流れ落ちた瞬間、スマホが鳴った。画面表示を見ると、輝也だった。

「お父さんから、出て」

私は拓海にスマホを渡す。拓海ははしやぎながら電話に出た。もしもし、おとーさん！ うん、うん、そうなの、ハンバーグ食べたよ。拓海の声をぼんやり聞きながら動かしだした箸が、次の言葉で止まった。

「すごいんだよ。おかあさん、お料理してるの。あのね、菜の花畑みたいな。すつごくきれいでおいしそう！」

はっと顔を上げる。菜の花畑？ 黄緑色の皿を使ったから、拓海にはそんなイメージが湧いたのかもしれない。ポロポロの卵の群れが、突然報われてほえんでいるように見える。

拓海は「おかあさん、おとうさんが代わってっ」とスマホを差し出した。

「朝美？ すごいじゃん、何作ってるの」

輝也のやさしい声に、私はこらえきれず息を漏らした。拓海に聞かれないように奥の部屋に移り、小さな声でしゃくりあげながら伝える。

「卵焼き……お弁当の。ぜんぜんうまくできないよ。ちゃんと形にならないし、なんかべとべとしてるし」

「明日のために練習してるの？ 卵焼きじゃなくてもいいじゃ

ん、炒り卵でもゆで卵でも」

「ダメなの！ 卵焼きじゃなきゃ。去年、幼稚園でもらった拓海のバースデーカードに、好きな食べものは卵焼きって書いてあったでしょ、卵焼きがないと絶対がっかりするよ」

「しないでしよう、がっかりなんて」

「する！ するよ。本の通りにやってみるつもりなのに、なんでぜんぜん違うのができちゃうの？ 卵焼きも作れないこんなダメなお母さんじゃ、拓海がかわいそうだよ」

「朝美」

輝也がピシヤリと私を制した。珍しく怒ったのかと、私は身をつくめる。でも輝也は、穏やかに言った。

「どのフライパン使ってる？」

「え？ 壁にかけてあった赤くて丸いの……」

「それ、古くてテフロン（熱した時に食品がこびりつかないようにするもの）はがれちゃってるから卵がくっつくでしょ。場所がちよつと違うからわかんなかったと思うけど、卵焼き用の四角いのあるんだ。買い替えたばかりだから使いやすいと思う。シンクの下の扉開けてみて。青い柄だよ」

言われるままキッチンに戻り、扉を開けたら、あった。小ぶりの、長方形のフライパン。たしかに本にもこんなのが載っていたけど、私はてっきり撮影用のプロが使うものだと思っていた。

「最初によく熱して。卵を落としたときにじゅつて音がする

ら、先を越された。

「がんばったね。素敵なお母さんじゃないか、ちつともダメじゃないよ。朝美のそういうまじめで純粋なところ、好きだよ」

さつきぼっかり空いてしまった穴が、じわじわと埋まって満たされていく。輝也のその言葉が、私の居場所を作ってくれたように思えた。

私はゆっくりと言った。

「オ、輝也の絵、たくさんの人に見てもらえるといいね」

ちよつとずつ、家事もできるようにがんばってみるね。そんな言葉も浮かんだけれど、今日のところはとりあえず、胸にしまっておくことにした。まずは明日の朝、幼稚園でボーダー添島さんに会ったら、私から「おはようございます」と挨拶しよう。

気がつくとキッチンに拓海が入り込んでいて、「これ食べていい？」と問いかけてきた。私の腰のあたりで、さらさらしたまあるい頭のキューティクル（髪の毛の表面を）が光る。できそこないの卵焼きを指さしているその小さな手は、菜の花にとまったモンシロチョウみたいだった。

（青山美智子「きまじめな卵焼き」より）

くらいだよ。調味料は塩ひとつまみでOK。油は少量、直接じゃなくて、キッチンペーパーに含ませて引いて。たぶん、ひっくり返すタイミングがちよつと早いんだと思う。待ってるから、ちよつとやってみ」

私はいったんスマホを食器棚の端に置き、輝也の指示をたどった。その四角いフライパンは軽くて扱いやすく、信じられないくらいきれいな卵焼きが生まれた。角にうまく卵を押し当てると、形も整えやすい。百点とはいえないけどそこそこ合格だった。

「な、なんか、できたみたい」

「でしょ」

四角いフライパンは、卵焼きを皿に移してもまだすべすべで、いつさいのこびりつきがない。

「なんて優秀なフライパン。丸いほうだと、ぜんぜんダメだったのに」

「いや、丸いのも優秀なんだよ。深くでどっしりしてて、すごく使いやすいんだ。炒めものとか麻婆豆腐作るときなんか、それが一番。ちよつとパスタ茹でたりもできるしね。いくら新しくても小回り効いても、卵焼き器に中華なんて任せられない。合った道具があるんだ」

合った道具。そう言われて、なんとなく自分が慰められた気がした。奮闘してくれた大きな丸いフライパンを私はそつと愛でる。輝也と話せてよかった。ありがとうね、と言おうとした

問一 — ア「振り返らずに私は、再び歩き出した」とありますが、ここでの「私」の気持ちを説明しなさい。

問二 — イ「不遜な自分に気づく」とありますが、自分のどのような点を不遜だと感じたのでしょうか。具体的に説明しなさい。

問三 — ウ「自分が泣いているのだと知って驚いた」とありますが、「私」は自分が泣いている理由についてどのように考えましたか。説明しなさい。

問四 — エ「絵なんか売れないで。誰にも認められないで。オ、輝也の絵、たくさんの人に見てもらえるといいね」とありますが、この気持ちの変化を説明しなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

北海商事株式会社は、北海道の名産物を、各地に紹介し、販売する会社です。大手百貨店の安田デパートから、「月末の休日に、新宿支店と池袋支店で北海道物産展を行うので、カニ弁当を仕入れてほしい」と依頼されました。

北海商事では、新宿支店の仕入れ販売を大西社員が担当し、新宿支店よりやや規模の小さい池袋支店の仕入れ販売は小池社員が担当することになりました。両支店での販売を終え、翌月の月例報告会では、販売部長が下記のグラフを示しながら、両支店での成果を社長に報告しました。

「大西社員は、販売用に500個のカニ弁当を発注し、小池社員は、450個のカニ弁当を発注しました。最終的に、新宿支店では、見事にカニ弁当は完売となりました。池袋支店では、20個の売れ残りが生じてしまいました。グラフは、九時の開店から十九時閉店までの、カニ弁当の売れ行き総数を示したものです。二人の社員の評価について、社長はいかがお考えになりますか」

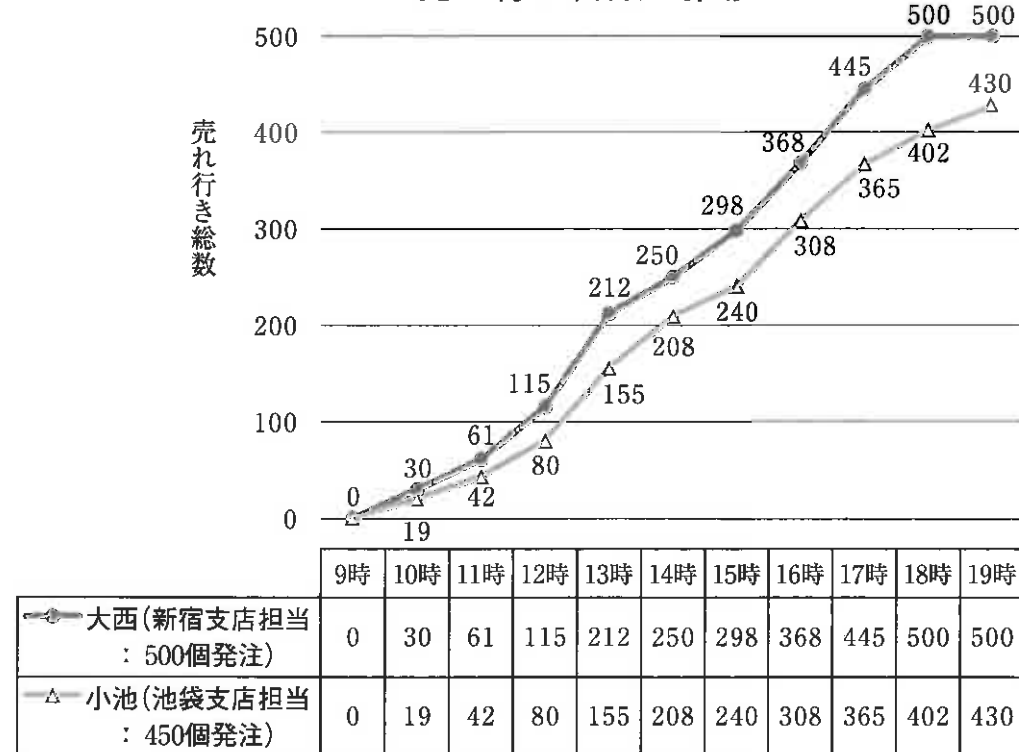
この報告を聞いて、社長は、

「部長の報告は客観性に欠ける。君はすでに大西社員を高く評価しようとしているのではないか」

と伝えたうえで、

「私は、小池社員の方を高く評価する」と答えました。部長が、

売れ行き総数の推移



「新宿支店よりやや小さめの池袋支店でも、小池社員が、高い成果を上げたということがポイントでしょうか」と尋ねたところ、社長は、
「支店規模の問題ではない」と告げ、自分の考えを示しました。

問一 社長は、部長の報告のどの表現に、客観性に欠けたものを感じたのでしょうか。一つ探し出し、なるべく短い字数で書きぬきなさい。

問二 大西社員より小池社員の方を高く評価する社長の考えとは、どのようなものと考えられるでしょうか。「たしかに」「しかし」「一方」「したがって」の四つの言葉を、この順に、文の先頭に使って、四文で説明しなさい。

【三】 以下の問題にある空欄①～⑤には、それぞれ、上の漢字から続いて二字熟語を作り、下の漢字へ続いて二字熟語を作ることのできる漢字が入ります。空欄に入る漢字については、例題一のように、上の漢字から続く熟語の場合と、下の漢字へ続く熟語の場合で、同じ読み方になる場合もありますが、例題二のように、異なる読み方になる場合もあります。
空欄①～⑤に入れることのできる漢字を答えなさい。なお、人名・地名などは熟語にふくまれません。

・問題	・例題一	安()理	答え「心」	例題二	劇()所	答え「場」
状①度	下②順	意③式				
辺④目	博⑤別					

A 国 語

18

解 答 用 紙

受験番号
氏 名

一

問一

--

問二

--

問三

--

問四

--

二

問一

--

問二

たしかに
しかし
一方
したがって

三

①

--

②

--

③

--

④

--

⑤

--